

君のすべては僕のもの

Yuina & Syun

流月るる

Ruru Ruzuki

termity



エタニティ文庫

目次

君のすべては僕のもの

5

書き下ろし番外編
幸せの証

329

君のすべては僕のもの

『お姫様になりたい。そしていつか王子様に迎えにきてほしい』
それは、女の子なら誰もが一度は夢見ること。

私、矢内結愛にとっても「お姫様」は憧れで。

私にとつての「王子様」は駿くん。

「いつか」は二十歳。

『二十歳だ。二十歳になっても結愛の気持ちが変わらなかつたら結婚しよう』

十六歳の時、駿くんに言われた言葉。

それを宝物のようにずっと抱えてきた。

私はあと一か月半で二十歳になる。

私が五歳、駿くんが十五歳で婚約してから十五年――

中学卒業と同時に留学し、ずっと海外で生活していた駿くんが、ようやく日本に帰ってくる。

プロローグ

私は幼い頃、幼稚園が終わると母の親友の家である「高遠家」のお屋敷に預けられていた。

専業主婦だった母が義理の祖母の介護に携わることになったせいだ。それでも私は寂しくなかなかった。

広い敷地に建つ大きな洋風のお屋敷は、お城みたいで素敵だったし、大奥様をはじめ、高遠家に関わるみんなが私をかわいがってくれたから。

なにより、ここにいれば王子様に会える。

高遠家の一人息子である高遠駿くん。彼は私の上の兄である颯真くんと同じ年で、私より十歳年上だ。

さらさらの黒い髪、いつも優しく見守ってくれる眼差し、そして私の名前を呼んでくれる穏やかで甘い声。

テレビに出てくる芸能人に負けないくらいかっこよくて、絵本の中の王子様のような存在だった。

その日、私はお手伝いの清さんに見守られながら、高遠家のお屋敷で遊んでいた。

五歳の誕生日プレゼントにもらった、綺麗なドレスを着たお姫様のお人形。その髪をブラシで梳いていると、颯真くんがやってきた。

「結愛……結愛の夢はお姫様になることだよな？」

「うん！ お姫様になりたい！」

私は、綺麗なドレスを着たお人形を颯真くんに見せた。

「お姫様には王子様が必要だろう？」

「王子様……」

母が寝る前に読んでくれるお姫様の絵本には、王子様が必ず出てくる。

お姫様の隣には王子様がいるものだ。

「じゃあ、颯真くんが王子様になってくれる？」

王子様がいれば、私もお姫様になれる。だったら颯真くんが王子様になってくれればいい。私をかわいがって、遊んでくれるお兄ちゃんだもの。

期待を込めてお願いしたのに「俺と和真は結愛のお兄ちゃんだから王子様にはなれないんだ」と颯真くんは言う。そして少し寂しそうに笑い、私の頭に手を伸ばした。和真くんというのは、下のお兄ちゃんだ。

「でも駿なら結愛の王子様になれる」

私は颯真くんのうしろに立つ駿くんを見上げた。

「駿くん！ 駿くんが結愛の王子様になってくれるの？」

大好きな駿くんが私の王子様になってくれれば、私はお姫様になれる。

問いかけに対して、駿くんが私の目の前で膝をついて、いつものように腕を広げてくれた。私はすかさず飛び込んでいく。お日様みたいな暖かな匂いがして、ほっと安心できる腕。

駿くんは、私をふんわりとお姫様抱っこして、優しくほほ笑んでくれた。

「結愛ちゃん、僕が王子様になってもいい？」

「私は駿くんのお姫様になれる？ 駿くんは本当に私の王子様になってくれるの？」

「結愛ちゃんがよければ、喜んで」

私は駿くんの首のうしろに手をまわして「王子様になって、駿くん！」と言った。

この時、いつも優しい両親と高遠のおじさまたちが、複雑な表情で私たちを見守っていたことなど気付かずに。

これにより、駿くんがなにを犠牲にしたのかも気付かずに。

矢内結愛、五歳。

高遠駿、十五歳。

両家の間で、ひっそりと約束が交わされ、私は駿くんの婚約者になった。

婚約を交わしたものの駿くんは、中学卒業と同時に留学し、高校、大学、大学院と海外にいた。

私は小学校に入学すると、長期休みのたびに駿くんの留学先を訪れては、サマースクールに参加したり短期留学をしたりして、駿くんと過ごした。

英語を頑張って覚えて、慣れない海外生活に挑戦できたのも、駿くんに会いたい一心から。

けれど、成長するにつれてわかった気になっていた。

駿くんが海外留学したのは、高遠グループの御曹司としての勉強のためだということ。私たちの婚約は、親友同士である母たちの「お互い子どもが生まれて異性だったら結婚させたいね」という夢見がちな願いからだだったということが。

駿くんが私と婚約した意味と、婚約が母たちの身勝手な夢だけではなかったと知ったのは十六歳の時。

私が矢内家の養女で……私の立場を守るために、駿くんは婚約してくれたのだ。

皮肉にも自分がお姫様になれる立場ではないと知ると同時に、私は駿くんに恋をした。

第一章 二十歳の約束

「大丈夫、だよな？」

私は全身を姿見に映してくりりとまわった。

オフホワイトの七分袖のワンピースは、襟元と裾に紺色のラインが入って甘さを抑えている。染めたこともなければ、パーマをかけたこともないまつすぐな髪は、脇の下のラインをキープ中。

高校を卒業してから覚えたメイクはナチュラルに、唇にだけ薄桃色のグロスをのせた。

三月に竣工したばかりの新居は、独特の匂いがする。

無垢の木の床に漆喰の白い壁。吹き抜けの天窓から降り注ぐのは、春らしい柔らかな光。

リビングダイニングの家具は、まだ少し余所者の表情をしている。

冷蔵庫の中には、温めればすぐに食べられる和食のおかずを準備した。

駿くんの書斎となる部屋は、残念ながらもまだ段ボールで埋め尽くされているけれど、寝室だけは綺麗に整えた。これで、時差ボケで疲れていても体を休められるはず。

ようやく日本に帰ってくる主を、この新居も私もずっと待っていた。

五歳と十五歳で交わした婚約が、私にとって大切な約束に変わったのは十六歳の時。

『二十歳だ。二十歳になっても結愛の気持ちが変わらなかつたら結婚しよう』

自分が矢内家の養女だったと知って、動揺して泣きじゃくっていた私に、駿くんはそう言った。

駿くんはずっと私の王子様で、憧れで、大好きで。

けれど、幼い頃の私にはまだその感情が恋かどうかなんてわからなかった。

十六歳のあの日から、私は駿くんを一人の男の人として意識して、もくもく広がる雲みたいに恋心をふくらませていった。

でも、私の思いをよそに、駿くんはなかなか日本に帰ってこず、私も高校生になると忙しくて、彼のところに遊びに行くことができなくなった。

インターネット電話やSNSで頻繁にやり取りはしているも、会えない日々は寂しい。駿くんは本当なら、私の高校卒業と同時に帰国する予定だった。けれど、仕事の関係でどうしても滞在期間を一年延期せざるを得なくなったのだ。

それを知った時、私は不安に襲われた。私が二十歳になるまで待つって言いながら、

本当は私から婚約解消を言い出すのを待っているんじゃないか、と思って。

帰国延期が決まった時、私は「本当は日本に帰ってくるつもりなんてないんでしょー！」と駿くんに怒鳴った。

それから「駿くんが帰ってこないなら、私が駿くんのところへ行く！」とぐずぐず泣いた。すると駿くんは「必ず帰ってくるから、結愛に新居を任せるよ」と言ってくれた。そうして建てたのがこの家だ。

高遠家のお屋敷の敷地内に建てた新居には、駿くんの意見を聞きながらも、私の夢を盛大に詰め込んだ。

駿くんが帰ってくるのを信じて、二人で一緒に暮らせる日を夢見て。

中高一貫のお嬢さま学校を卒業した後、私は高遠家のお屋敷で働きながら、新居の建築を見守り、彼の帰国を待っていた。

もうすぐ、駿くんが帰ってくる。



自分が矢内家の養女だと知ったのは十六歳の夏。

私はその年の夏休みに、父方の祖母の七回忌ななかいきに出席していた。

「高遠との婚約なんて、口先だけなんじゃないの？」

法事と会食を終え、雑然とした雰囲気の中、親族がそこかしこで会話している。私はお手洗いにいく途中で聞こえてきた「高遠」という言葉に思わず立ち止まり、耳を澄ませた。

「あの子も十六歳になったんでしょ？ 結婚できる年齢になったのに具体的な話が出ないのは、やっぱり口約束だけで、なんの確約もとれていないからじゃないの？」

「高遠と繋がりがもてるなら、つてことで正式に引き取って今後も育てることを認めたのに……どこまでも役に立たないわね」

「あんな子引き取らなきゃよかったのよ。あの女の弟と、どこの馬の骨ともわからない女との間にできた子どもなんか！」

高遠、婚約、十六歳、どの言葉も私にあてはまるものだった。

『結愛ちゃんって、お兄さんたちと年が離れているのね』

兄がいると言うと同級生たちは驚いていた。

『似ていないね』

そう言われることも多かった。

私はその場から抜け出して、タクシーで高遠家に乗り付け、その時たまたま帰国して

いた駿くんに会いに行った。

両親にも兄たちにも真実を問いただすことはできない。

駿くんが日本にいてよかった。

でなければきっと私は夏休みをいいことに、駿くんがいる国へと向かったに違いない。日曜日でお屋敷にいた駿くんは、仕事の時とは違う普段着姿だった。

ジーンズに貝ボタンの並んだ明るいグレーのポロシャツ。

制服姿だった私の突然の訪問に驚きながら、駿くんはいつもと同じ優しい笑みを浮かべる。

そんな彼に向かって、私は言った。

「十六歳になったよ。もう結婚できる年だよ。なのにどうして駿くんは結婚の話を進めないの？ 私がお父さんとお母さんの実の娘じゃないから？」

言葉にして初めて、涙がぼろぼろこぼれた。

「なんで？ どうして？」、そんな言葉ばかりを口走った。

三歳の七五三から始まった家族写真。

幼稚園の入園式、小学校の入学式、颯真くんや和真くんの成人式でも節目ごとに家族みんなで写真を撮ってきた。家族の証あかしのようなそれらがガラスが割れてバラバラになるように私の心の中で飛び散っていく。

「結愛……落ち着いて。矢内のおじさんたちに確認する。結愛には今、おいしいケーキと紅茶を準備させるから。ここで待っていて」

駿くんの部屋の応接スペースで私はソファにもたれかかって泣いていた。

私は両親の子どもではなかった、兄たちの妹ではなかった。

一瞬で自分が紐ひもの切れた風船のような頼りない存在になった気がする。

駿くんは部屋に戻ってきて、まず温めたタオルを渡してくれた。

涙と鼻水でぐちゃぐちゃの顔を拭いても、また出てきてしまうから顔を押さえた。

テーブルのほうからかちやかちやとケーキと紅茶を準備する音がする。

駿くんは私の隣に座ると、そっと肩を抱き寄せてくれた。いつも安心できるその腕に私は甘える。

「矢内では一切話題にしないように厳命されていたはずだけど、今のご当主に代わってから拘束力こうくわうりきが薄れたみたいだね。おじさんたちには一応許可を得たから、僕から説明する。なにが聞きたい？」

「私のお父さんとお母さんって誰？」

「結愛のお父さんは……矢内のおばさんの弟だ。結愛は姪ひまで、颯真たちとは従兄いとこ妹になる。結愛が二歳の時、家族の乗った車が事故にあった。結愛だけが助かったけど、君はその時の事故のショックで記憶を失ったらしい。他に身寄りがなかったから、姉である

おばさんが結愛を引き取った。君が二十歳になったら、君のご両親が真実を知らせるつもりだったんだ」

「お母さんは？」

「それは、ごめん。結愛のお父さんが愛した女性としかわからない。その女性も身寄りがなく、事情があつて素性を隠していたようだ。だから結愛のお父さんも結婚してからは居場所を一切知らせてこなかった。毎回、消印は違うけれど、季節ごとに写真が送られてきていたらしいよ。結愛の小さな頃の写真があるのはそのおかげだった。事故が起きた時おばさんのところに電話が来たのは、お父さんがもしもの時に備えておばさんの連絡先を書き残していたからだ」

実の父は母の弟だった人。実の母は事情を抱えた謎多き女性。

どこの馬の骨ともわからない女という親戚たちの発言は、そこからきていたのだ。けれど、ささやかでも矢内家と血の繋がりがあつて私はほっとしていた。

母は伯母で、兄たちは従兄になるけれど、それでも誰の子かわからない他人であるよりずっとマシに思えた。

駿くんの手が私の肩を優しくなでる。

実の娘でなかったシヨックは大きくて、それでも姪である事実には救われて、そして家族は確かに私を大事に育ててくれたことを思い出す。

私は体を起こして駿くんのポロシャツを掴む。

「駿くんは……知っていたんだよね？」

「知っていた。事故の連絡がきておじさんたちは病院にかけつけた。その間、颯真たちはうちに預けられていたし、それは結愛が退院するまで続いたから。退院してからも、しばらくの間みんなうちで生活していたんだ」

昔からなにかあれば、矢内の親族ではなく高遠の家を頼りにしていた。

母方の実家だと思つて過ごせばいいと、清さんたちには言われていて、私は孫のようにかわいがられた。

そんな幼稚園の頃の記憶が、ほんやりとある。

だから私は駿くんもお兄ちゃんだと思つていた頃があつたし、高遠のおじさんとおばさんのことも父と母のように慕つていた。

「私を……引き取るのは反対だったって……聞いた」

「そんなことまで話していたのか」

駿くんはあきれたように言つて「再度厳命したほうがいいな」と呟く。

「高遠と繋がりがもてるなら、つてことで正式に引き取つて今後も育てることを決めたのに……」

親戚たちは、それも言つていた。

「私に事情があったから……駿くんは私と婚約したの？」
母親たちの身勝手な願望じゃなかった。私たちの婚約には、もっと切実な事情が隠されていた。

五歳と十五歳で婚約を交わすという不自然さに、私はいつからか目を背けていたのかもしれない。

「結愛」

「そのためだけの婚約で……本当は結婚する気なんかない？ 私は十六歳になって、もう結婚できる年になったのに、なんにも決まっていけないのは口先だけの約束だったから？」

「結愛、落ち着いて……」

「そう、だよ、私たちが十歳も違うんだもの。駿くんからいつ婚約解消されるかってずっと不安だった。でも駿くんは言わないから……大人になれば、このまま結婚できるんじゃないかって。駿くんは待っていてくれるんじゃないかって」

「そうだよ、結愛。僕は待っている。君が大人になるまで僕は待つ」

「私、もう大人だよ。十六歳になったんだもの、結婚だってできる！」

自分がなにを言っているのか、もうわからなかった。

実の娘でなかったことのショックと、駿くんとの婚約の本当の理由を知って混乱して

いた。

私たちの関係は、仲のいい兄妹のような距離から変化していない。

本当は駿くんにとって最初から、私は婚約対象になるはずのない存在だった？

駿くんは私のために犠牲になったの？

婚約を解消しなかったのは私の立場を守るためだけで、そこに彼の意思はまったくなかった？

「結婚……する気なんてなくて。私のために駿くんは、犠牲になっただけ？」

ぼろぼろ、ぼろぼろと見開いた目から涙がこぼれ落ちていく。

私は家族の一員ではなくて、婚約は立場を守るためのもの？

「結愛！僕は犠牲になつたわけじゃない！」

「嘘っ!! 結婚する気があるなら、どうして私を恋人にしてくれないの！私はまだ子どもだから？ 高校生だから？」

私の肩を抱き寄せようとする駿くんの手を振り払う。

「それとも、矢内の実の娘じゃないから？」

私の言葉はそこで途切れた。

駿くんの唇が私の唇に触れて、それ以上なにか言うのを阻んだから。

初めて触れる他者の唇に頭が真っ白になって、目の前の駿くんが一瞬、誰だかわから

なくなる。

「結愛……君はまだ結婚の意味をわかっていない。僕と結婚するってことは僕とキスをするってことだ、その先にも進むってことだ。それがどういことかわかるか？」

怒りといら立ちが混じったような静かな口調のあと、ふたたび私の口は塞がれた。

強く押し付けられた唇はやわらかい。そんなことを考えていた直後、するりと入り込んできた舌に私は驚く。

そんなキスがあるという知識はあった。でも、現実には自分の口内に他人の舌が入り込む感触は想像したこともなかった。

私を抱きしめているのは、いつもは安心できるはずの腕。

けれど、今はその大きさも強さも私を混乱させ、わずかな恐怖を生み出した。

どうやって息をすればいいのかわからなくて、ただ駿くんの舌に翻弄される。なにが自分の身に起こっているのか把握できない。

家族のようで兄のようで一番信頼していた彼が、男の人だと意識した瞬間。

「やっ！ やだっ、駿くん、嫌っ！」

私が駿くんを怖いと感じるなんて、初めてのことだった。

「怖がらせてごめん。でもわかっただろう？ 結愛が今、僕に抱いている気持ちは思慕や憧れでしかない。結愛の気持ちがある限り、僕も君をそういう対象として見る

わけにはいかない。結愛が僕を一人の男として見てくれるようになったら……僕もきちんと向き合う。結愛はまだこれからたくさんの人と出会う。世界が広がっていく。今は恋がわからなくても、僕以外の男に恋する可能性だってある。僕はそういう君の可能性をつぶしたくない」

涙ではやけている視界の中に、駿くんの真摯な眼差しがあった。それは、今までと同じ私の知っている駿くんの姿。

でも唇には、激しい熱の余韻が残っている。

「二十歳だ、結愛。二十歳になるまでに他に好きな男ができたなら、僕たちの婚約は解消しよう。僕を恋愛対象として見られない時も同じだ。結愛の僕への気持ちや憧れから恋心になり、それが二十歳になっても変わらなかつたら、その時は結婚しよう」

「その間に駿くんに好きな人ができたら？ それでも解消するの？」

「僕から解消することはない。だから結愛は……あと四年、自由にしていいいんだ。僕じゃない男を好きになってもいい」

「私は駿くんが好き」

そう、私は駿くんが好きだ。それは幼い頃から変わらない。

でも駿くんは、寂しそうに私を見て言った。

「うん、知っている」

「こういう好きじゃ、だめなの？」

「……二十歳になっても変わらなかったら、その時はね」

だめとも、いいとも言わずに、駿くんは「二十歳」と期限を区切る。

「婚約者」とは名ばかりで、昔からよく知っていて、ずっと仲良くしてくれる憧れの兄のような存在でしかなかった駿くん。私は彼を、この時初めて一人の男性として意識した。

憧れと恋の違いもわからずにいた私が、恋に囚われ始めた日。

そして「二十歳」という約束に縛りつき始めた日。



お屋敷の裏口から続く小道を抜けると、駿くんは立ち止まって新居を見上げた。

「図面や画像では見ていたけど……実物はやっぱり違うな」

駿くんが感嘆の言葉をもらす。

本当は空港まで迎えに行きたかったのに、そのまま一度会社に挨拶に向かうと言われしまったので、お屋敷に戻ってくるのを待っていた。

駿くんの帰りを待っていたのは私だけじゃない。

お屋敷で働く人たちも、心待ちにしていたのだ。みんなで並んで出迎える。

そうしてひとしきり話したあと、やっと私は新居を案内することができた。

設計士さんをお願いして建てた家は、伝統的な洋風建築のお屋敷とは違う、モダンな佇まいだ。表から見える場所には細長い窓しかなく、シャープな外観をしている。直線的なデザインをやわらげるために、白い壁に、一部こげ茶の板や石のタイルを張ってぬくもりを出した。

駿くんは家を建てると決めた時、ほとんどのことを私に任せてくれた。

最初は私一人で考えていいのかと躊躇ったけれど、駿くんは「結愛も一緒に住む予定の家だろう？」と私に未来を示唆してくれた。

帰国が延期になって、「日本に帰る気がないんだ！」って泣いた私を宥める意味もあつたのかもしれない。

家づくりはいろんなことを決めていかなければならない。

その都度駿くんに相談して、密に話して、離れている寂しさを埋めていった。

私は駿くんの家づくりを任されて、その使命のおかげで帰国が延期になった一年を乗り越えられたところがある。

「駿くん、入って」

私はドキドキしながら、木目調のドアを開けた。

家に入る駿くんの背中を見て、なんだか泣きたくなる。

やっと、やっと駿くんが日本に帰ってきた。

今までは帰国しても、一週間も経たないうちに、すぐに海外へ戻っていった。もうそんな彼を見送る必要もない。

この空間に駿くんがいて、そしてこれからはずっとこの家で過ごしていくのだと思うと、胸がいつぱいになってくる。

玄関の高い天井を見上げる駿くんの横顔に、帰国したばかりの疲れは見えない。

お正月に会った時より髪が少し伸びただろうか。年を重ねても駿くんはあまり変わらないように思える。

いつまでも、私にとっては憧れの王子様のまま。

駿くんは一通り玄関を見回したあと、私に視線を向けた。

「結愛、ただいま」

「うん、おかえりなさい」

日本に帰ってくるたびに繰り返した言葉。

同じ言葉のはずなのに、違う気がするのなんでだろう。

物心ついた頃から、海外留学していた駿くんとは、離れていることのほうが多かった。それなのに、駿くんを恋をして、私の中で婚約の意味合いが変わって、離れていること

がだんだんつらくなったのだ。

でも、もう離れなくてすむ。

「やっと帰ってこられた」

ほんと安堵したような駿くんの声は、その言葉を深く実感しているように聞こえた。

「うん、やっと帰ってきてくれた」

「結愛、おいで」

「……………」

駿くんは変わらない。

私にとって、駿くんは十歳も年上で、気付いた時にはもう大人の男の人だった。

無邪気な子どもだった頃は、私は広げられたその腕に素直に身を委ねられたのに。

お姫様抱っこされるのが嬉しかったのに。

私はもう素直に腕に飛び込める、小さな女の子じゃない。

たとえ駿くん……いまだに子どもだと思われているとしても。

「駿くん……私もう子どもじゃない」

もうすぐ二十歳になるよ。

気楽に腕を広げた駿くんへ抗議の意味も込めて、拗ねてみせる。

「子どもだなんて思っていないよ」

それでも、昔のように無邪氣むじやきに抱き付くことはできない。だって触れれば、私だけがドキドキしているのを見抜かれてしまう。私だけが意識しているんだって思い知らされる。

「結愛、僕は日本に戻ってきた。こうして一緒に住むための家もできた。僕がいない間に……二十歳になるまでに、結愛はいつでも自由になれた。猶予ゆうよはあと少しだ、結愛」
「なんで、そんなこと言うの？」

駿くんが「結愛は自由だ」と言うたびに不安だった。

突き放されている気がしてしまっから。

「猶予ゆうよなんていらぬ。私は早く駿くんと結婚したいのに……」

このまま帰国しなかつたらどうしようって、心配だった。それに、二十歳を過ぎたら過ぎたで、また別の言い訳をされて結婚を先延ばしにされたらどうしようって不安だったのに。

今帰ってきたばかりの駿くんが、またどこか遠くへ行きそうに思えて、帰ってきた実感がなくて縋すがりつきたくなる。

「猶予ゆうよはいらぬ？」

駿くんがわずかに目を細めて、低くかすれた声を吐き出した。

いつも優しく私を見つけてくれていた眼差しが、射るように貫く。

私にとって駿くんは小さな頃から誰よりもよく知っている人。

スーツ姿も、緩みなどひとつもないネクタイの結び目も、額にかかるとすぐな髪も、穏やかな笑みを浮かべる口元も。

けれど、この瞬間、初めて私は駿くんが知らない男の人に見えた。

駿くんが私の腕を掴つかんで引き寄せた。いつもなら、ふわりとやわらかく背中にまわされる腕が、今はきつく激しく私を抱きしめる。

それは家族のような、兄のような親しみのある抱擁ほうようとは違って、力強さとか、男っぽい香りとかを感じさせるものだった。

「しゅ、駿くん？」

「猶予ゆうよはいらぬんだらう？ 結愛、ここでは僕たちは二人きりだ」

耳元に吹き込まれた声音こゑは、聞いたこともない熱を孕はらんでいた。私の心臓は急激に音をたてて存在を主張する。

二人きりになることなんて、これまでだって何度となくあった。

腕を広げられれば、私は無邪氣むじやきに飛びついていたらけれど、思えば駿くんからこうして手を伸ばされたことはあまりない。

ましてや、私の髪に指を絡めたり、首筋に鼻を押し付けたりするなんて。

混乱と緊張と羞恥で、私の心臓は口から飛び出そうなほどドキドキしている。キスで

塞ふさがれているわけでもないのに、息の仕方さえ忘れそうだ。咄とつさ嗟さに逃げ出そうと腕を動かすと、不意にこめかみに唇が押し当てられた。かするような軽いものではなく、強く長く感触を覚えさせるように。

「結愛、家の中を案内して」

やがて駿くんはするりと私から離れた。

私の混乱など放置して玄関を上がっていく。

「結愛」

名前を呼ばれて差し出された手に、反射的に指を伸ばした。

部屋の中なのに、なんで手を繋いでいるんだろう。

疑問を抱いても口にはできない。

駿くんとうとうして手を繋いだのは小学生以来だ。それに、こんなふうに指と指を絡かめめるような繋ぎ方はしたことがなかった。

「こっちがリビング、こっちがダイニングとキッチン」などとモデルルームの案内人のごとく説明しながらも、私は動揺しっぱなしだった。

この家に入ってから、駿くんの雰囲気が違う。

絡かんだ指先でいたずらをするみたいに私の手の甲をなぞったり、振り返って抱き寄せ

るみたいに腕を伸ばしては「結愛、こっちはなに？」と収納の扉を指したりする。

距離が近付くたびに、駿くんの体温とか匂いとかを感じて、私はただただ混乱して

いた。

「結愛の部屋はここ？」

「うん」

二階に上がって、ファミリースペースの向かいにある扉を開く。

壁の一面だけ淡い紫色の小花模様の入った壁紙を貼った部屋は、カーテンとベッドカバーも似た色合いとデザインにして、ヨーロッパと北欧風が混じり合ったような雰囲気だ。

窓辺にカウンターデスクと収納棚を備え付けたので、部屋にある家具はベッドだけ。

高校を卒業してから、私はお屋敷に住み込みで働いている。私の荷物はまだそこに置いたままだ。

この家に私の部屋も準備するように言われたけれど、一緒に暮らしているのか自信がなかったから。

「荷物はまだ入れてない？」

「うん。駿くんに聞いてからにしようと思って。あ、ここが駿くんの寝室」

駿くんの寝室の壁紙は一部が暗いグレー。ここにも大きなベッドが入っているだけだ。

駿くんは部屋に入ると、ベッドのスプリングの具合でも確かめるかのように、そこに腰をおろす。手を繋いだままの私は自然にその隣に座る形になった。

不意に「ここでは僕たちは二人きりだ」という駿くんの言葉が蘇る。

今までは帰国すると駿くんはお屋敷で過ごしていた。当然そこには、お屋敷の使用人たちがいいて、二人きりになることはない。

思えば駿くんは、私が成長するにつれて二人きりになることを避けていた気もする。

ここは駿くんの寝室で、私たちは彼のベッドに並んで座っていて、この家には完全に私たち二人だけだ。

そう意識した途端、繋いでいた駿くんの手に力が加わった。

まるで私が逃げ出そうとしたことに気付いたみたいだ。

「結愛はどうしたい？」

「え？」

「二十歳になるまでは、はじめをつけてお屋敷にいる？ それとも今夜からここで暮らす？」

私は、駿くんがやっと日本に帰ってきたことと、一緒にいられることだけで嬉しいと思っていた。

ここに二人で住むつもりで家づくりだとしてきた。

駿くんは私を見つめながら、ネクタイに手をかけてゆっくりと緩めた。

その仕草が色っぽくて、頬がかあつと熱くなる。

きつと今、私の顔は真っ赤になっている気がする。

「結愛、僕たちはずっと離れて暮らしていた。婚約は名ばかりで、顔を合わせていても、兄と妹のような関係でやってきた。でも、僕は君の兄ではないし、君は妹じゃない」

あたりまえのことを、あえて口にした駿くんには私は驚いていた。

「結愛……わかつている？」

私はいつのまにか口の中に溜まった唾液をこくと呑んだ。

まっすぐに私を見る駿くんの目から逃げ出したいのに、むしろひきつけられる。

「う、ん、駿くんは兄じゃないよ」

「僕を男として意識している？」

「しているよ！ 私は駿くんが好きだし、今だって……ドキドキしているもの」

「結愛。男のベッドでそんな無邪気なことを言うもんじゃない」

繋いでいた手が離れて、肩にまわったかと思ったら、背中がふわんとスプリングのきいたベッドに埋もれた。私の頭の横に駿くんが肘をつく。見上げた先にもものすごく近付いた顔があった。

「駿、くん？」

「結愛には、僕が兄じゃないってことをわかってもらわなきゃならない」

「わかってる、よ」

「そうかな？」

駿くんの大きな手が私の頬を包んだ。体重など一切かかかっていない。けれど、駿くんから発せられる強い威圧感で、身動きがとれない。

「二人きりだとわかっていて警戒心もなく、こうして押し倒されながら抵抗もしないのには？」

頬に触れた手がゆつくりと私の髪を梳く。そうしてまた頬から耳、首筋へと辿っていく。肌をかする長い指先は、安堵よりも緊張を生み出す。

どくんどくと速くなる鼓動が耳に届いた。

二人きりの静かな部屋で聞こえるのは、自分の心臓の音と緊張で吐き出す息遣いだけ。

「結愛」

艶やかな熱のこもった声が目の前の唇からこぼれる。

同時に駿くんの親指が私の唇をゆつくりなぞった。

そこにいるのは、幼い頃から慕ってきた兄のような人じゃない。

怖い、そう感じた自分にびつくりした。

私の心中に気付いたように、駿くんもぴくりと震え、そして目を細めて私を見下ろす。

この人は……誰？

こんな駿くんは、知らない。

よく知っているはずなのに、見知らぬ男の人に見えて体が勝手に固まる。

「結愛、僕にちゃんと恋をして。僕は君を一人の女性として見るし、君にも僕を男として意識してもらおう。そのうえで、君には答えを出してほしいんだ」

私は恋をしているよ、駿くんが好きだよ。

そう言いたいのに口にできない。

怖い、そう思う自分がいるのも事実だから。

「猶予がいらぬなら、今夜からここで僕と一緒に暮らそう」
 たっかりと駿くんが綺麗に笑う。

それはいつも目にしてきた穏やかな笑みとは違って、私はあやつられた人形のように、こくと頷くことしかできなかった。



「駿くん、この箱の中身はここに出していいの？」

「ああ、あとで整理するからとりあえずそうして」

駿くんは帰国後、土日合わせて五日間の休みを確保していた。その間にいろんな手続きをするために外出したり、荷物の整理をしたり、この家での生活基盤を整えている。私もお屋敷の仕事はお休みして、駿くんの手伝いをした。駿くんはお屋敷を任せていた執事の斉藤さんや家政婦の清さんに、今後の指示と私の処遇についても話す。

私はお屋敷内に自室を確保したまま、この家で一緒に駿くんとの生活を始めることになった。

『私が二十歳になるまで』という約束はどうやら彼らにも把握されていたらしく、最初は正式に結婚が決まる前から同居を始めることに難色を示していた。

けれど、駿くんは「このままの距離感で結愛が結婚に応じても意味がない」というようなことを語って説得した。

すると斉藤さんと清さんは顔を見合わせて、結果仕方なさそうに受け入れてくれたのだ。

「僕にちゃんと恋をして」と駿くんは言った。

私はちゃんと駿くんを恋をしている。

駿くんのが好きだし、駿くんのそばにいたいし、結婚したいと思っている。でも駿くんは首を横に振る。

まるで私の気持ちはまだ恋になっていないとでも言いたげだ。私は納得できないけど。

段ボール箱から本や雑誌を取り出して、棚の空いた場所にしまった。

「結愛、これもそっちに」

と言って、駿くんが同じ棚に雑誌を置いた時、指先が触れた。

咄嗟に手を引いてしまふ。

バラバラと床に雑誌が落ちた。

気まずい！

一緒に暮らし始めて数日……駿くんの思惑通りなのかどうかわからないけれど、私は彼との距離感がうまく掴めなくなっていた。

考えてみれば、こんなに長い時間一緒にいるのは初めてなのだ。

海外留学中も長期休みには遊びに行っていたし、帰国時にも会っていた。インターネット電話だって頻繁にかけていた。

好きな人がやつと帰ってきて、さらに一緒に暮らせることになった。

喜んでいいはずなのに、私は気の休まる暇もなく、ずっと緊張した日々の中にある。

「結愛、大丈夫か？」

「大丈夫！」

分厚い海外雑誌は重みがあるから、足にでも落ちていけば痛かっただろう。幸いかすった程度で済んだので、私はすぐに拾おうとかがんで手を伸ばした。

駿くんはその手を掴まれて、再び引こうとしたのに今度はできなかった。反射的に顔を上げると、私と同じように床にかがんだ駿くんが、じっと私を見る。熱をたたえた眼差しは、帰国して時々見せるようになったもの。

「結愛。僕は意識してほしいんであって、怯えさせたいわけじゃない」

「……怯えているわけじゃない」

駿くんは私の手首からそっとその手をずらして指を絡めてきた。

「そうかな？」

「駿くんがいつもと違うから、わからなくなつて……」

「違うだろうね、僕は結愛には兄のような振る舞いしかしてこなかった。男としての僕と一緒にいるのは怖い？」

数日一緒に暮らした中で、私は確かに混乱している。

昔と同じように優しく見守ってくれたり、同じ距離を保ったりすることもあれば、こんなふうには急激に踏み込んできたりもする。

「怖がらせたいわけじゃないし、怯えられるのも嫌われるのも望んでない。結愛が落ち着かないなら、お屋敷に戻っても構わないよ」

「怖くないの、そうじゃなくて恥づかしいだけなの。私の答えは決まっているし、気持ちだつて変わらない！ お屋敷には戻らない！」

絡み合った手を引かれ、私は駿くんの中の腕の中に収められた。

逃げ出したいと思うのは怖いからじゃない、恥づかしいからだ。

「だつたら慣れて」

「……………」

返事の代わりに、私は強張つた体から少しずつ力を抜いた。

今までは大好きだった腕の中。安心して身を委ねられた場所。

でも今はドキドキのほうが勝つて、落ち着かない。

男として意識させられて、私の中にあつた駿くんへの好意がどんな形を変えていく。あたりまえにあつた駿くんへの「好き」という気持ちは、憧れや思慕や親愛の延長線上にあつて、温かで優しいものだった。

けれど今は、戸惑いや緊張、そして羞恥が加わつて、いろんな色がぐるぐる混ざり合っている感じだ。

これが「恋」なら、心臓がいくつあつても足りないと思ふ。

駿くんの手が私の頬を包んだ。

その合図のような仕草に、私は反射的に目を閉じる。

額にこめかみに頬にと降ってくる唇は、私の中に一つずつ熱を灯していく。小さいけれど力強いその熱は、いざれ体中に広がっていきそうだ。

キスは唇以外の場所に降り注ぎ、手は腕や背中などに触れていく。

『駿くんこそ私のこと、どう思っているの?!』

そう、最初にこんな風に触れられた時に聞いた。

すると駿くんは、『二十歳になるまで僕は言葉にはしない。君に流されてほしくないから』と言った。

そうして私に触れながら『わからない?』と聞いてきた。

駿くんは言葉でないもので、私に気持ちを伝えてくる。

自分の勘違いだったら怖いと怯える時もある、私はこのまま与えられる感情を信じたいのだと思える時もある。

私は駿くんに「怖いわけじゃない」と示すために、勇気を出して腕を伸ばして抱き付いた。胸に溢れる愛しさが駿くんに伝われば良いと願って。



一緒に暮らし始めて数週間、私は同居生活のリズムに少しずつ慣れ始めていた。

今日も朝からキッチンで白い天板の上に木のまな板を置いて、冷蔵庫から取り出した野菜を切り分ける。

前日の夜からひいた出汁を火にかけて、二合炊きの土鍋にも火をつけた。

炊飯器ではなく土鍋でご飯を炊くのは、少量でも早くおいしく炊けるから。

ぐつぐつ沸騰したらすぐに火を弱火にしないといけないので、音に気をつけて調理する。

昨夜のうちに下ごしらえを済ませていた、小松菜のお浸しを小鉢に盛る。今日のお魚は鯖の味噌漬。これはお屋敷で働く料理長からのお裾分け。焦げやすいので火加減は要注意だ。

木目のトレイをふたつ準備して、食べ物を盛った器を並べているとダイニングの扉が開く。

「おはよう、結愛」

「おはよう、駿くん」

駿くんはまだセットしておらずサラサラの髪のまま、薄い水色のシャツと淡いグレーのスラックス姿だ。

そうして私を背後から抱きしめてくる。

最初にこうされた時は、びっくりして器の中のお料理をぶちまけてしまった。駿くんは笑いながら『毎朝するからすぐに慣れるよ』って言って一緒に片付けてくれた。その時はまさか本当に毎朝こうされるとは思っていなかったけれど。

男としての駿くんを見せられた当初は「怖い」という気持ちがあった。駿くんが同じ空間にいることにドキドキしすぎて、家事を言い訳に逃げ出した時もある。

駿くんは、私の様子をうかがいながら、慣れ親しんでいた雰囲気を出したり、あえて壊したりして、それを繰り返すことで私を慣れさせていった。

十歳も年上なんだから、私が彼の掌の上で転がされるのは仕方がないと思う。駿くんの手がお腹にまわって、ぎゅっと私を抱きしめる。

背後から包むように抱きしめられると、駿くんの大きさがリアルに感じられる。それに、馴染んだ匂いに安堵さえ覚え始めていた。

そうして顔を上げると、唇が降ってくる。頬に額にこめかみに、唇以外の場所にはあますところなくキスされた。

『どうして唇にはしないの?』という問いは『歯止めが利かなくなるからだ』と不満気に言われて以来、口にしていない。

十六歳で初めてした時は、怖いだけだったキス。今は、どんなキスをしてくれるんだろうかと期待さえし始めている。そのたびに、私

は駿くんが好きなんだなと日々実感する。

だって、駿くんを求めているから。

兄じゃない、男としての駿くんをもっと知りたいと思いつ始めているから。

「緊張しなくなったな……」

「駿くんが、慣れてって言った」

「緊張していたのもかわいかったし、こうして慣れてくれるのも嬉しいけど、結愛が二十歳になるまで耐えられるかな……」

眉間にしわを寄せて、駿くんが唸る。

「耐えなくてもいいよ」

私の誕生日はもうすぐだ。

そして私の答えはとうに決まっている。

こうして駿くんに触れられるたびに、本当は無理やりにも奪ってくれればいいのになと思っている。同居し始めて、駿くんは私の思考をそんなふう塗り替えた。

だからといって、私からキスをしかけたり、誘ったりなんてできないんだけど。

「結愛、朝から僕を暴走させるつもり?」

……しないくせに、という気持ちで見上げると、駿くんが私を小さく睨む。そして、はあっとため息をついてから、くすつと笑った。

「ここまで我慢したんだ。約束はきちんと守る。今日もうまそうだな、ごはんにしようか？」

やっぱりあっさり私を手放して、駿くんはダイニングの椅子に座った。駿くんは知らない。

こうして抱きしめられるたびに、私の体が変化していることを。体の奥に甘いものが満ち始めていることを。

私もそれを誤魔化しなくて、食事の準備にとりかかることにした。

駿くんは必ず最初にお味噌汁を口にする。お味噌汁は、出汁をきかせればお味噌の量は少しいい。出汁とお野菜のうまみとが溶けて、同じお味噌を使っても毎朝違う味になる。

海外生活が長かった駿くんは、その反動のように和食が好きだ。

そして、駿くんがお味噌汁を口にして、ふっと表情をゆるめたのを見て私は今日も上手にできたんだとほっとする。

それを確かめてから私も食事を口に運び始めた。

「今夜、夕食いらないんだっけ？」

「んー。結愛のごはんのほうがおいしいんだけど。残念ながら会食が入っている」

「うん、わかった」

土鍋で炊いたばかりのごはんは、ふっくら艶々している。

口の中に入れると甘みがふわっと広がって、とてもおいしい。

鯖も焦げ付かずに味噌の味が染みているし、料理長にお礼を言わなきゃ。

「結愛……二十歳の誕生日だけ」

おもむろに切り出されて、私はお箸を置いて背筋を伸ばした。

「あ、うん」

知らず鼓動が大きくなってくる。

「二十歳だからみんなでお祝いしたいだろうけれど、僕と二人だけでいい？」

母からも、誕生日当日どうするつもりなのかという連絡がきていた。二十歳の誕生日は金曜日だから、家族でのお祝いは日曜日でも構わないわよ、と言ってくれたのは、この日が特別だと知っているからだ。

「駿くん、仕事は大丈夫なの？」

「結愛の大事な二十歳の誕生日だからね、昼間は仕事だけど夜はなにがあっても空ける」

「駿くんと二人がいい」

大切な、ずっと心待ちにしていた二十歳の誕生日。

特別な日はやっぱり駿くんと二人きりがいい。

颯真くんたちは、いろいろ言ってくるかもしれないけど、そこはお母さんに任せよう。「ああ、じゃあ、レストランを予約するから一緒に食事をしよう。そうだな、せっかくだからもつとかわいくしてもらおうか？　今のままでも結愛はかわいいけど、誕生日だからお姫様みたいになろう？」

「もうお姫様って年じゃないよ」

「関係ない。結愛が僕のお姫様なのは変わらない」

甘さを感じる目をして言われて、私はうつむく。

駿くんのこんな言葉には慣れてきたつもりだけれど、やっぱり恥ずかしい。

「うん、ありがとう」

私がお姫様になれるかどうかはともかく、駿くんが王子様なのは確かだ。王子様の隣にいるのにふさわしい姿になれるなら、少しでもかわいくしてもらいたい。

「楽しみだな。じゃあ結愛、清さんにいろいろ頼んでおくから」

「うん」

二十歳まであと少し。

駿くん……私の答えは決まっているよ。

私が駿くんにふさわしくないとしても……私は駿くんを諦めたりしないの。



駿くんが仕事に向かったあと、私はこの家での家事を済ませる。

そして、白いブラウスと黒いスカートに着替えるとお屋敷に向かった。お屋敷で働くのに制服はないけれど、トップスは白、ボトムスは黒と色だけ決まっている。

こうして着替えることで、私はお仕事モードに気持ちを切り替えた。

玄関わきの曲がりくねった小道を抜けると、高遠のお屋敷が見える。

海外建築の様式を取り入れた別荘風の大きな建物、それが高遠のお屋敷だ。

白い外壁に丸みを帯びた柱、深緑色の屋根、等間隔に並んだ白い窓枠は黒いアイアンの飾りがアクセントになっている。様々な種類の低木で区切られた先に広がるのは、芝生の裏庭。タイルデッキにはこげ茶色のガーデンチェアが並び、こちらからは見えないけれど奥にはプールもある。

ゆるやかな角度のスロープは高遠家自慢の洋風庭園に繋がっている。そして青々とした紅葉の木に隠れるようにしてお屋敷の裏口があった。

使用人専用の休憩室を抜けて厨房に入ると、料理長が忙しそうに動きつつも私に気付いてくれる。

「お疲れさまです」

「お疲れさま。今、碧が部屋の片付け中だ。それから今日はサロンがあるからな」

「はい、片付けに行つてきます」

厨房からお屋敷の中に入ると確かに玄関のほうから、サロンに來た女性たちの声が聞こえる。遭遇しないように気をつけながら、臘脂の絨毯敷の廊下を足早に歩いた。二階への階段を上ると、半分開けられたこげ茶色の扉の向こうで碧さんがベッドのシーツをはがしていた。

「碧さん！ なにをすればいいですか？」

「じゃあ、バスルームのほうお願い」

碧さんは料理長の奥さんと、料理長や清さんのお手伝いを中心に、このお屋敷の家事全般をサポートしてくれている。

このお屋敷で働いている人は執事の斉藤さん、家政婦の清さん、料理長に、奥さんである碧さん、お屋敷のメンテナンスも請け負っている運転手さん、そして私の六人だ。

高遠のお屋敷は、駿くんの曾祖母である大奥様が、二年前に大往生で亡くなるまで管理していた。

駿くんの祖父母は、大奥様が亡くなったのをきつかけに、駿くんのお父さんに事業を譲り、山奥に引つ込んでしまった。

ちなみに駿くんのご両親は仕事の関係で海外を転々とし続けている。駿くんのお父さんは高遠グループを統括する親会社の社長をしているのだ。いずれは、その地位を駿くんが継ぐことになっている。

そして駿くんはこの家とは別に、自分の家を建てた。

高遠のお屋敷で働くみんなは、お屋敷に泊まりにくる来客をもてなすのが仕事だ。

この家がそういうふうに使われるようになってからの歴史は長い。ホテルがまだ少なかった時代、海外建築を取り入れ、別荘の機能も併せ持ったこのお屋敷は、人が集まるのに適していた。

ここで重要な話をするのも自然と増え、いくつかの契約が交わされたこともあった。多くの親族が一緒に住んでいたこともあったし、まったく血縁関係はないが将来性のある人間を住まわせて、才能の支援をしたこともあったらしい。

私を引き取った直後、親戚でもない矢内の家族が一時期ここにお世話になることができたのも、そういう流れがあったためだった。

そして数年前までは、国内外の取引先の中でも特に重要な相手をもてなすために、このお屋敷は頻繁に利用されていた。

海外企業のトップなどは、日本に來る時にホテルに泊まるより、高遠家に泊まりたいと言うのだそうだ。今でも、長期の視察や、合同プロジェクトなどで日本に滞在が決ま

ると、ここに滞在可能かどうかの問い合わせがくる。

大奥様が亡くなってからは、使用人の人数も減ったので、せいぜい一組か二組ぐらいのお客様しか受け入れてはいけません。

もっとも、ここはホテルではない。

ホテルのようなサービスではなく、あくまでも高遠家の大切なお客様として、家族の一員のような気持ちでお世話をする、それがこの在り方。

だから料金も取らない。

そういったことを了承する人たちだけが、このお屋敷にやってくる。

「お客様の予定はありますか？」

数日滞在していた海外の取引先の方は、今日帰国する。もしかしたら駿くんと一緒にお屋敷を出たのかもしれない。

「駿さんが、あまり入れないようにしているみたいよ。しばらくは使わないかもね」

二年前、大奥様が亡くなって、このお屋敷を相続したのは駿くんだった。

それから彼はこのお屋敷の活用の仕方を試行錯誤している。

元々、大奥様が体調を崩し始めてからは、お客様を迎える頻度は減っていたけれど、駿くんが相続してからは特に減った。

その代わりに家政婦の清さんによるサロンが開催されるようになった。

去年は試行的に開催していて頻度が低かったけれど、駿くんが帰国してから徐々に高くなっていく。

「その分サロンのご希望は増えているみたいだけど」

「そっかあ、清さんのお眼鏡にかなう人がどれぐらいいるんだろう」

いずれ、宿泊客は必要最低限になって、サロン開催にシフトしてしまうのかもしれない。

「ふふ、そうねえ。あ、でも結愛ちゃんのお友達の実尋ちゃんだっけ？ 彼女は今日いらしているはずよ。結愛ちゃんの休憩時間と都合が合えばお茶でもしたらどう？」

「真尋の予定が大丈夫で、清さんの許可が出たら、そうします」

私は碧さんと一緒に白い大きな布を、部屋の調度品にかけていく。しばらく使用しないので、埃がつかないようにするためだ。

少しずつお屋敷は変わっていく。

どんなふうに変化していくのか楽しみでもあり、寂しくもあった。

休憩時間を迎えた私は、無事、清さんの許可も得て、真尋の待つティールームに向かった。

料理長が気を利かせて準備してくれたケーキとティーセットをワゴンで運んでいく。

立ち読みサンプル はここまで